

# NEWSLETTER



大阪女学院大学 大阪女学院短期大学

教 員 養 成 セ ン タ ー

- 巻頭エッセイ 「新しいライフスタイル?・・・放送大学とともに」…… 1
- 教職勉強会 …………… 1
- 2017年度 教員免許状更新講習 …………… 2～3
- 教育実習実施報告 …………… 3

- 教職フィールドワーク (韓国) …………… 3
- 授業の玉手箱「ホンモノの語り部」が見せる「ホンモノ」 …………… 4
- 書籍紹介「今日すべきことを精一杯!」 …………… 4
- 教員養成センターの教育活動 ● 編集後記 …………… 4

## 巻頭エッセイ

## 新しいライフスタイル?・・・放送大学とともに

森 均

10 数年前のことである。大阪府教育委員会事務局に勤務していた頃、大阪府立特別支援学校教員の特別支援学校教諭免許状の取得率は 50% 以下だった。また、大阪府立特別支援学校で生じる体罰事件は特別支援学校教諭免許状を持たない高校から転勤してきた教員が自分を抑えきれずに起こしていた。そこで 10 年間で特別支援学校教諭免許状取得率を 80% にアップする計画を立てた。その中心が放送大学で免許状を取得することであった。

放送大学で特別支援学校教諭免許状が取得できる案内パンフレットを全校に配布し校長会、教頭会でも呼びかけた。それだけでなく自らも放送大学で学び特別支援学校教諭免許状を取得した。その後、校長となり放送大学大学院で 3 科目 6 単位を取得した。校長になると誰も何も教えてくれなくなったからである。

単位認定試験は大阪教育大学天王寺キャンパス内にある放送大学大阪学習センターで行われた。そこで大阪教育大学夜間大学院実践学校教育専攻の学生募集ポスターを見たのである。大阪教育大学に問い合わせると「他大学院で修得した単位は審査の上 10 単位まで認められる。放送大学大学院も該当する」とのことであった。それでも迷った。もう 50 歳を越えて今更学生? と。しかし校長として未熟さを感じていた私は受験を決めた。入学すると私より年上の校長が 2 人もいたのである。そのことはさておき、3 科目 6 単位は審査の結果単位認定され、毎晩通う必要がなくなり

他の学生より余裕をもって通学できたのである。そして夜間大学院での学びは、論文のテーマの決め方、研究手法、論文の書き方だけでなく人的ネットワークも得てその後の人生に大きな影響を及ぼした。

最近は、週に 1、2 度であるが夕食前後に衛星放送で放送大学の講義を視聴している。すると校長時代になぜあれほど急激な変化があったのか、文章には起承転結を明らかにしないほうがいい場合がある等知るのである。もちろん無料である。放送大学の HP には番組表もアップされているので一度ご覧いただきたい。放送大学に科目履修生として入学すれば、講義がインターネット配信されているのでいつでも視聴することができるようになっている。

かつては「働きながら学ぶ」だったが、現在は「働いた後に自宅で学ぶ」ではないだろうか。もしかしらば変化の激しい時代に生きる私たちの新しいライフスタイルなのかもしれない。

注) 10 数年前、特別支援学校は盲学校・聾学校・養護学校と分かれておりそれぞれ別の学校種であった。免許状も特別支援学校教諭免許状ではなく盲・聾・養護別であったが、混乱を避けるため特別支援学校という表記を用いた。なお、大阪府においては、障害のある幼児・児童・生徒が特別な存在ではないとの認識のもと特別支援学校を支援学校としている。

## 教 職 勉 強 会

東條 加寿子

今年度から新たに「教職勉強会」を立ち上げた。勉強会は、教職課程履修生や教職に関心を持つ学生を対象とし、学年間の交流を図りながら教員免許状取得という共通の目的に向けて様々な議論を深めることを目指している。今年度は 2 回の勉強会を開催した。

- 第 1 回 2017 年 7 月 1 日 (土) 13:00～14:30 (参加者 28 人)  
テーマ：教育実習
- 第 2 回 2017 年 12 月 2 日 (土) 13:20～14:50 (参加者 25 人)  
テーマ：介護実習、教員採用試験 等

第 1 回目の勉強会では、6 月に教育実習を終えたばかりの短大教職課程履修生 2 名と大学教職課程履修生 3 名がそれぞれの実習校での 3 週間を振り返り、苦労したこと、工夫したことなどについてスライドを使ってプレゼンテーションをした。授業、学級運営、学校行事、指導して下さる先生や担当クラスの生徒との関わりなど、教育実習は試行錯誤の連



続であるが、実習生たちは同様に忘れられない感動の実習最終日を経験したようだ。実習ではしっかりした英語力が求められたことは言うまでもない。

第 2 回目の勉強会では、3 年生による介護実習報告、4 年生による教員採用試験合格体験記の発表があった。そのほかに、夏に実施した「教職フィールドワーク (韓国)」の成果報告と小学校で「教育インターンシップ」に従事している 4 年生からの発表もあった。特別支援学級や介護施設での実習が何故教職課程で求められるのかの話し合いや、生徒の 4 割近くが日本語を母語としない小学校での授業補助活動の発表は、多様化する教職の現場で教員として今何が求められているのかに気づくよい機会となった。

教員免許状を取得するためには、通常の科目履修とは異なる取り組みが必要で、教職課程履修生には期待感とともにさまざまな不安がある。先輩として経験を語ったり、お互いに目指すべきキャリアについて話し合い、共に教員免許状取得という大きなゴールを目指していきたい。

## 2017年度 教員免許状更新講習

講習 1：アウトプット重視の発音指導と作文指導

講習 2：英語音声の仕組みを取り入れた指導・評価と授業の工夫

### 講習 1 8月8日(火) 担当：夫明美、福島知津子

#### 講座のねらい

発音と英作文にフォーカスして、それらを生徒のアウトプットを促進する手段として指導に活かす方法を考える。第一部の「発音指導」では、体験型ワークショップ形式で、テキストや絵本などを用いて発音向上のための練習を行うとともに、生徒のアウトプットを豊かにするための発音指導法や評価法について、実用的な教材を使用して学ぶ。第二部の「作文指導」では、まず、英作文で日本語と英語の文構造の違いのため引き起こされるエラーについて、事例をもとに理論的に考える。そして、グローバルエラーについて、何故見逃してはいけないのか、その理由とともに分析し、それを防ぐための文法・作文指導法を紹介する。

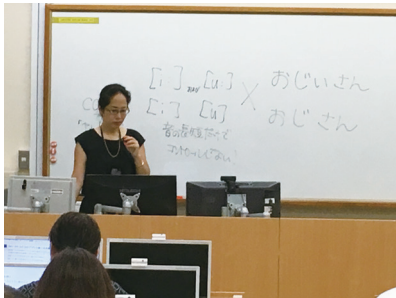
#### 講座内容

第一部の「発音指導」では「音声学」または「発音学」の学習履歴について聞き取りを行ってから講習をスタートさせた。個人的な差異が大きく見られたので、全員にとって重要であると考えた3つの側面について理論的説明を詳しく行った。実際の発音練習や発音指導のコツの伝授も同様に重要であるから、十分な時間を持つように心がけた。

受講者のアンケート結果から、理論的な説明の部分は「学び直し」または「新たな発見」の機会として役立てていただけたように思う。実際の発音では、参加者全員が「お腹の底から声を出して」取り組んだおかげで、フィードバックをしやすく、一体感も得られたことが大きい。(夫 明美)

第二部の「作文指導」ではまず、受講者に普段の英作文活動や指導について書面で記入してもらった。せっかく 30 名以上の現職の教員が一同に会したので、普段の授業や指導がどのようなかを共有した。その後、英作文指導のうえで「学習者のエラーの理由がわかっているならば、ストレスをためることなく、その対処にも困らない」、を基本姿勢とし、なぜこのようなエラーが起こるのかを考えながら、これは避けられない学習過程の一部であることを先行研究や自身の研究成果をもとに講義を行った。その後、高校生が実際に使用した中間日本語を介して文法的に正しい英文で自分の伝えたい内容を伝える練習をするワークシートを使って講義を進めた。英語学習者が統語構造の大きく異なる日本語から英語に訳す際には、橋渡しの役割を担う「中間日本語」をうまく使うことが初級段階を脱する足がかりとなることを伝えた。

アンケート結果から、英作文の指導に「中間日本語」という具体的な方策を示したことは好評であった。また、何か書かせた限りは、教師によるフィードバックは必要である。そうでないとコミュニケーションとしてのラ



イティングという前提が崩れる、という自身の反省もこめた研究の話をしたことで、「英作文＝英検対策や受験対策」というものを再考する機会となったというコメントもあり、幸いである。(福島 知津子)

### 講習 2 8月9日(水) 担当：大塚朝美、東條加寿子

#### 講座のねらい

英語授業における音声指導技術のスキルアップを図る体験型ワークショップを二部に分けて行う。第一部の「英語音声の仕組みを取り入れた指導・評価」では、超音節レベルの英語音声の仕組みについて理解を深め、歌やチャンツなどの実用的な教材を用いて実際の指導に役立てる方法を議論する。また、どのような音声評価基準(ループリック)を設定して評価するのか、音声評価法についても考える。第二部の「英語音声を取り入れた授業の工夫」では、英語音声の仕組みを実際に発話に生かすタスクについて考え、英語を生徒一人ひとりにとって自分の言葉として生き生きとしたものにする工夫を探る。

#### 講座内容

第一部の「歌を用いた音のつながりの指導」では、連結、脱落、同化の音の現象に注目し、歌を使用してそれらをインプットする授業について講義を行った。教材となる歌の選択の基準は様々であるが、主に歌のテンポや歌手の発音の明瞭さ、また歌詞の内容に注意を払うことが大切であること、また、教材作成をする教員が自ら楽しんで取り組めることも重要である。参加者からは、何となく空欄にしていた単語の選択も、学習項目を意識することで歌の使用が効果的なインプットになると感じたという感想が寄せられた。

「チャンツを用いた文強勢の指導」では、英語の強勢拍リズムに焦点を当て、チャンツを使いながらリズム感覚を身につけるような指導について講義を行った。チャンツの選択については、最近利用できる市販教材も増えているが、簡単なものであれば生徒でも作成することができる。英作文の活動と組み合わせるとオリジナル・チャンツを作成し、発表させることで書く・話す活動にも発展する。参加者からも生徒が作るチャンツを試してみたいという声が聞かれた。

「音声評価基準と実際の評価」では、中高の現場で様々な形で実施されている音声の評価について、参加者それぞれの評価における悩みを共有した。どの音声項目を、何を基準に、どう評価するのか、という3点について取り上げ、特に音声評価基準の設定については、教授場面や生徒によって目指すところが様々であるが、教員自身の目標こそ明白でなければならない。実際の中高生の音声を使用して各参加者が評価をし、その結果を数人のグループでシェアした。なぜそのように評価したのか、どのような基準設定が妥当なのかなど、参加者間で活発な意見交換が行われた。

(大塚 朝美)



午前中の音声演習を受けて第二部の「英語音声を取り入れた授業の工夫」では、音声の要素を取り入れてどのような授業展開を



すればいいのか、アクティブ・ラーニングをキーワードとして実践例を示しながら議論を深めた。まず、ICTを活用したアクティブ・ラーニング実践の試みとして、iPadでiMovieというアプリを活用してビデオに字幕を入れる活動を行った。英語ビデオに字幕を入れる活動は直訳からの脱却の取り組みとして有効であるとともに、生徒自らが制作したビデオを利用すれば学びの主体性が高まることを期待できる。次に、発音練習や会話のロールプレイといった従来の音声活動も、発音の難しさやコツについてグループでの話し

合いや教え合いを取り入れることによって、活性化した授業につながられることを演習で体験した。アクティブ・ラーニング実践にあたっては、教員の授業工夫やICT習熟、教材・教具の準備が不可欠であるが、学習者が主体になり、授業内での対話を軸として個人の学びが深まる授業を模索したい。

教室のレイアウトもグループワークがしやすい配置にし、講習を通して受講生間のコミュニケーションが高まった。アクティブ・ラーニングが現場で喫緊の課題になっていることを共有するよい機会となった。(東條 加寿子)

\*\*\*\*\*

2017年度教員免許状更新講習の受講生による総合的評価及びコメントは、教員養成センターホームページ上で公開しています。

教員養成センター HP :

<http://www.wilmina.ac.jp/oj/?ttc=教員養成センターについて>



## 2017年度 教育実習実施報告

福島 知津子

2017年度は大学4年生4名と短期大学2年生6名、合計10名が教育実習に臨んだ。実習校訪問においては、実習校の指導教諭も日々の業務が多忙ななか、未熟で知識も不十分な実習生に対し、客観的な視点を持ちながら大事に指導していただいている姿がいずれの学校訪問においても印象的であった。

教育実習中の学生をみて気づいた点をひとつ述べると、実習生が考える「母校」での教育実習とそこに待つ教師文化とのconflictである。年少であればあるほど、母校にまだ思い入れや思い出が多くある。かつてのクラス担任であった教諭が在籍していることもあれば、育ててもらった授業担当の教員が今は管理職の教諭となって在籍している学校もある。しかし幸か不幸か、教師文化というのは、「生徒」をみつめる視点と「同僚」をみつめる視点異なる。先輩と後輩の上下関係がどの教

科においても少なからず存在し、例え温かくみつめているつもりであっても「教育実習生は教師の見習い」という感覚はどちらの校種においても拭い去ってしまうことはできないのではないか。そこで生じる構造が、「優しく迎え入れられた『卒業生』」のはずが、想定以上の様々な教員からのキツイ（と学生が感じる）指導により、学生たち個人個人のなかで大なり小なりのconflictが生じたようであった。それはあくまで、事前の実習生の心がけが甘く、準備が十分でなかったためと言わざるを得ない。「教師の見習い」扱いを受けるといことは、大人扱いされていると言い換えることができるからである。この構造について、いかに現実感をもって指導するかが、今後の教育実習事前指導の課題と言える。



## 教職フィールドワーク（韓国）

東條 加寿子

「教職フィールドワーク（韓国）」は教職課程を履修している大学2年生に開講されている科目である。国際的な視野を育み、その中で英語を生かそうという「大阪女学院らしさ」を教職課程の中に取り込んだ体験学習科目で、今回で3回目の学生派遣である。2017年度は8月20日から8月29日の10日間実施した。前半の7日間は、京畿道バジュ英語村で韓国の大学生とともに英語研修を受け、後半の3日間でソウル市内の高等学校を訪問して英語の授業を参観するというプログラムである。



英語村は英語教育推進のために韓国内各所に設置されているが、中でもバジュ英語村は最大規模で、唯一政府運営の公立英語村である。京畿道の中学生は、在学中に一定期間バジュ英語村でオールイングリッシュの研修を受けなければならない。内地留学よろしく、入り口には入管があり、構内の建物は英語圏の雰囲気漂わせている。バジュの英語村は海外の学生向けの英語研修も実施しているため、今回そのプログラムに参加したというわけである。世界各国から英語を母語とするスタッフ

集められ英語を教える。参加学生にとっては、韓国の英語教育政策の一端を垣間見ながらの英語研修となった。ただ、英語村も設立から10余年を経て当初の活気は失われつつあり、英語教育の次なる施策への転換期に差し掛かっているという印象だった。



後半の高校訪問では、韓国の高校の学習量に圧倒された。大学修学能力試験を受けて大学進学を目指す生徒たちは、その競争を勝ち抜くために日本とは比べ物にならない学習量を授業の中でこなし、さらに夕刻から夜にかけて補習授業が実施されていた。そんな中でも、オールイングリッシュで、ウェブ情報を活用したProject-basedの英語授業や、毎週1冊の英語の本を読み、グループワークで内容をまとめディスカッションをするといったLibrary Englishの授業など、いわゆるアクティブラーニング的な授業が多くみられ、質量ともにしっかりとした英語の授業を参観することができた。

アジアの隣国韓国の英語教育実践に触れ、日本での英語教育の在り方を改めて考える貴重な機会となった。

授業の玉手箱

「ホンモノの語り部」が見せる「ホンモノ」  
夫 明美

2017 年度秋学期担当授業に、ハワイ島ヒロ市にある Hawaii Japanese Center 館長 Arnold Hiura 氏をお迎えし、「Food, culture, history」と題した特別講義を行っていただいた。筆者が外国から講師をお招きして講義をお願いするのが初めての機会であったので、事前の準備や当日のスケジュール調整など、(冷や汗をかきながら) 学ぶことが多くあった。Hiura 氏はハワイ島生まれの日系 3 世で、新聞編集者、博物館学芸員、教師としての勤務歴など、非常に多様なフィールドを経られた方である。ちなみに、前アメリカ大統領の Barak Obama 氏も元教え子のお一人である。

本稿特別講義の内容は、英語教育の重要目標の一つである「言語文化理解」に深くかかわるので、以下に簡潔に紹介したいと思います。明治元年に「ガンネモノ」がハワイの砂糖きびプランテーションへ労働者として海を渡ってから、多くの労働者が「故郷に錦を飾る」ことを夢見て、あとに続いた。しかし、彼らを待っていたのは過酷な労働条件と「バンゴー」(労働者が管理される番号札) に象徴される非人間的扱いや差別であった。毎日酷暑のもとで働く彼らの数少ない楽しみは、お昼ごはんであり、それぞれが限られた持ち合わせから「ベントーバコ」にご飯とおかずを詰めてキビ畑へと向かった。異なる民族背景をもつ労働者らが、ごはんを食べながら語り、それにとまなう「オカズの交換」を通じて、親交や友情を深めたい。共通言語を持たない人々の間で交わされる言葉が、やがて Hawaii Pidgin English へと発達し、(日系人労働者の場合)「塩辛などの地元色が強いオカズは控える」と

いった暗黙のルールも生まれたという。実際、「」つきのカタカナ表記した語彙は、地元で語彙として機能する日本語基盤の Hawaii Pidgin English である。

高校までの歴史教育ではスポットライトを浴びることが少ない「日系移民」の歴史について、「食べ物」を中心に講義いただいた。わずか 1 コマ分の講義ではあるが、受講生が歴史について新たな知識を得て、歴史と文化が密接な関係を持っていることについても認識を深めたように思う。実際、講義の内容をよく理解した質問やコメントも、学生から多く出ていた。

筆者が一番感銘を受けたのは、Hiura 氏のおばあさまが実際に使っておられた年季の入った「ベントーバコ」をヒロからお持ちくださり、参加者全員が手に取って間近に見る機会を下さったことである。これからますます国際化や多様化が進む社会に生きる若い学生に、ホンモノをわざわざお持ち下さったお気持ちが大きく響いた。博物館や資料館のガラス越しに見るのは全く異なる経験であるし、原体験を直に知る方のお話も非常に貴重である。

そして、30 年以上前に小学校の修学旅行で広島平和公園を訪れて被爆者の方のお話を聞いたことを思い出した。時代が変わるにつれ、被爆者の方からの「語り部体験」も、元プランテーション労働者からの「聞き取りも」非常に困難、または、ほとんど不可能になっている昨今である。だからこそ、原体験を有する方から「実際に現場で使用されていたもの」を個人的な思い出と共に拝聴できたことは非常に貴重であったし、バトンを渡されたものとして、授業内外を通して今後の経験を伝えていく責任感を新たにしたい。

Hiura 氏の講義内容に近いビデオ材料を記します。ご関心を持たれた方は、ぜひご覧ください。

Kurusu, S. (2011, June 23). Biting commentary episode 1: Kau Kau with Arnold Hiura. In Pacific Basin Communications. *Biting commentary*. Honolulu, Hawaii: KGMB.

書籍紹介

『今日すべきことを精一杯!』

日野原 重明 (著) 170 ページ  
ポプラ社 (2017/3/9) ¥864



時々出かける喫茶店の勘定書の裏に「人生には三つのものがあればいい、希望と勇気とサムマネー」と書かれています。ご存じの喜劇王チャップリンの代表作「Limelight」の中の名台詞 “Yes, life is wonderful, if you're not afraid of it. All it needs is courage, imagination, and a little dough.” の日本語訳の一つです。

今回は、much money でなくサムマネーでも教えられることの多い本をご紹介します。表題から、人生訓を垂れる書物はもう沢山と思われるでしょうか? ご安心ください。読み進めれば、著者自身の生き方そのものが「今日すべきことを精一杯」の言葉に凝縮されていることがお分かりになると思います。

著者は、敬虔なクリスチャンにして、終末医療の普及や「成人病」に代わる「生活習慣病」という言葉の提言など、医学・看護教育の刷新に尽力したことで知られています。本書のあとがきには「今から 30 年近くも前に出版された私の著書が、みなさんのお目に触れることになりました。・・医療現場でのその当時の思いを、渾身の力を込めて訴えかけたものです。2017 年早

春」とあります。その数ヵ月後に 105 歳で亡くなられたことを思うと時空を超えての last message と言え過ぎでしょうか。

以下は本文からの抜粋です。大学を所属されている校種に、患者を生徒、保護者に、医師を教員に置き換えて読んでいただければ幸いです。

○・・・なぜ講義の途中にでも質問しないのか。大学というところは知識の結果でなく、学ぶ方法を学ぶところなんだと、いつも学生たちに話してきました。

○人間はより愛情を抱いている相手に対しては高いピッチの声を出すものです。・・・私は、友人にも患者さんにも心配させないために、初めの「はい」を高い声で返事できるように努力してきました。

○医師の中には、なにか自分が上位の者になったかのように言葉が丁寧でなくなる人がいる。患者をして卑屈にさせるような医師の行動はよくない。そのことは医師が一番警戒しなくてはならないことです。

○ヒポクラテスが「判断は難しい、経験は誤りやすい」と言っています。つまり「前にこういう症例にぶつかったが、今度もそうだろう」と思うと、そうはいかないということが多いのです。みんな違うのだと思います。前にはこうだったから、今度もこうだと思つくと、大抵失敗します。

(中垣芳隆)

編集後記

昨年に引き続き、今年も教員採用試験現役合格者ができました。前センター長の下でのしっかりした教育活動の結実です。教員養成センターというプラットフォームで、一層充実した“協働”に取り組もうと気持ちを引き締めています。(東條加寿子)

大阪女学院大学・大阪女学院短期大学  
教員養成センター Teacher-Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造 2 丁目 26 番 54 号  
Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/oj/?ttc> 教員養成センターについて  
e-mail: [ttc@wilmina.ac.jp](mailto:ttc@wilmina.ac.jp)

教員養成センターの教育活動

- 2017年7月1日 第1回教職勉強会
- 2017年8月6日 教員免許状更新講習 1
- 2017年8月7日 教員免許状更新講習 2
- 2017年8月7~9日 集中講義「教育と人間」
- 2017年8月20日 ~8月29日 教職フィールドワーク(韓国)実施
- 2017年12月2日 第2回教職勉強会
- 2017年12月6日 教職専修 Graduation Project ポスターセッション